

国際芸術センター青森（A C A C）が開館した2001年当時、国内でアーティスト・イン・レジデンス事業に取り組んでいたのは、茨城県守谷市で小学校の旧校舎を活用した「アーカスプロジェクト」（1994年開始）、山口県美祿市の「秋吉国際芸術村」（98年開館）などがあつたが、まだ一般にはよく知られておらず、A C A Cのように大きな展示スペース

③ 初代館長のビジョン



浜田剛輔さん

で、反発心があつた。青森からびっくりするようなものをつくってみせるという思いがあつたと当時を振り返る。

作家の表現に寄り添う

で、反発心があつた。青森からびっくりするようなものをつくってみせるという思いがあつたと当時を振り返る。

アーティスト・イン・レジデンス事業を始めた日沼禎子（現・女子美術大学教授、青森市出身）は「浜田さんは、価値が定まったものを収蔵する美術館とは異なる、アーティストが自分の理想を実現していく場が絶対に必要だと考えていた。いつでもアーティストを迎えられ、常に実験的な場をつくりたい。アーティストの制作費や生活費を支給され、創作棟と宿泊棟を無償で使うことができた。学芸員とともに地域をリサーチして作品の構想を練り、技術員や市民ボランティアの手を借りながら、ここにしかない作品を生み出す。応募は海外から中心だったが、訪れた作家たちの口コミで国内作家からの

を備えた施設は少なかった。開館前から2017年まで学芸員を務めた近藤由紀さん（現・トーキョーアートアンドスペースプログラムディレクター）は「全国では公立美術館が飽和状態でバブルもはじけ、またつくるのかという風潮がある中

11年まで初代館長を務めた青森市出身の浜田剛輔さん（16年死去）は、自身がパフォーミングアーティストとして海外で滞在制作をした経験から、日本にもアーティスト・イン・レジデンスの場が必要だという強い思いがあつた。開館前から11年まで学

ストと市民が議論したり成果物を共有し合ったり、同じ地帯で集えるフットな場所こそが公共の場所だと考えていた」と話す。

アーティスト・イン・レジデンスのプログラムは、若手を想定した一般公募と、中堅以上の指名型を設定。作家は滞在中、応募も増えていった。コレクションを持たないA C A Cだが、当時は県立美術館がまだなく、市民に鑑賞の場を提供する美術館的な役割も求められた。レジデンスプログラムとは別に、実力ある作家に滞在制作、展示してもらつた「展覧会」も重視したほか、訪れた人



A C A Cの敷地内に設置された青木野枝さんの野外彫刻作品「雲谷」(2002年)

彩で、米や水を使った作品や展示室に異臭を放つ馬骨を置くものもあつた。それでも浜田さんは「やれる方向で考えて」というのが口癖だった」と日沼さん。作家の表現を尊重し、寄り添うことを大事にしてきた。国内で前例が少ないアーティスト・イン・レジデンスの活動を生活の基盤近くに掲載します。

ダンス施設で、学芸員たちも喫食しながら活動を続けていた。03年から10年まで学芸員を務めた眞武真喜子さん（現・インディペンデントキュレーター、北九州市）は「美術史や批評の枠組みや資料調査から入るのではなく、アーティスト個人個人の活動を生活の基盤近くに掲載します。」

（大友麻紗子）
※A C A Cは28日まで休館中。次回は3月1日